

勉誠通信

Bensey Newsletter 第二十五号

2010.9.15

小論・研究余滴・随想



上海万博から『蟻族』まで

関根 謙

脇役の深い味

糸井通浩

地球環境問題と多様性

中尾正義

ふりかえれば私がいる

立松和平

——不思議の国への旅(一)

めし・ご飯

小林祥次郎

——くいものの語源と博物誌——

近刊ニュース

・早坂暁コレ『夢千代日記』
クシヨーン17

・『蟻族』

・ネットワック時代
の図書館情報学 『デジタル書物学事始め』

・金子みすゞ 永遠の抒情』

・ネットワック時代
の図書館情報学 『情報管理と法』

・アジア
遊学136 『環境と歴史学』

・『中世結城氏の家伝と軍記』

・古今集注釈書 『古今集素伝懐中抄』
影印叢刊3

小論・研究余滴・随想など本誌にお寄せ願います。

勉誠通信 バックナンバー

<http://www.bensey.co.jp/mm.html>

上海万博から『蟻族』まで

関根 謙

(慶應義塾大学教授)

猛暑の上海研修

今夏、中国初体験学生四十名を率いて復旦大学で研修を行った。上海も連日四十度という猛暑で、復旦の先生によると「百年に一度」の異常気象だとか。午前中びつしりと中国語の授業、午後は太極拳や書法の実習、これに杭州旅行と例の上海万博見学もあつてかなりハードだったが、大した病人も出ず充実した中国体験となったのは、受け入れ先復旦大学中文系の献身的な先生方のおかげである。

この研修は両大学の文学部長同士の覚書に基づくもので、相手の学部長(中文系主任)は陳思和教授、北京の陳平原と並び称される中国現代文学批評の泰斗であった。私がとても楽しみにし

ていたのは、実はこの陳思和との再会だった。知り合ったのは二十数年前、胡風事件の被害者賈植芳先生をお宅に取材したときに、賈先生の愛弟子として紹介された時だった。彼はその後多くの論著を発表し、中国現代文学研究をいつもリードしてきた。私が彼から学んだものは非常に大きい。しかしこ



陳思和教授(左)と著者(復旦大学光華樓にて。二〇一〇年八月撮影。)

験小説の書き手たちが、写実的で成熟した文体を用いて中国社会の深部に切り込んでいるからだ。私はこれに對し、たとえば余華の『兄弟』などのように、かつてのタブーを抉りだした描写があることはみとめるが、それらはどこかステレオタイプ的であり、また逆にストーリーの奇抜さに耽溺しているようにも思えると、少しだけ反論してみた。思和は、それは見解の相違だろうと言い、角度を変えて最近の危うい傾向について語り始めた。

彼は現代中国の最も危険な傾向をナシオナリズムの台頭だと指摘した。北京オリンピックから上海万博、ジャッキー・チェンの謝罪事件まで、民族意識の高揚がかなりの知識人までもむしばみ、一般市民や農民層はそこに自己の不満の昇華した形を見出しているという。心ある人々はみな深い懸念を抱いているのだが、国内できちんと表現していくことは相当な勇気が必要なの

だ。私はそこに国家の意思の機能するシステムが厳密に動いており、勇気とかやる気とかいう単純さで国外のものが批評することのできない領域が存在しているのだと思った。それはタブーなのかと聞いてみると、思和はいきなり、彼らの労働組合について語った。中国の労働組合は懇親会や演劇鑑賞などしかやらない組織だが、彼はここでは組合が研究室の配分から帰国した研究者の利益保全の交渉など、実質的な内容のある活動をしているのだと笑みを浮かべた。言外は読まねばならない。この再会はやはり貴重な機会だった。

タブーとしての胡風事件

思えば中国では、思和の師賈植芳を獄中に幽閉した胡風事件の解明自体、本当の意味で進んでいるとは言えない。この事件のドキュメント映画『紅日風暴』の日本語字幕作成がいま慶應を中心に進んでいるのだが、この作

数年は公務多忙、いつの間にかご無沙汰を重ねていたのである。お互いの白髪に驚いた話はさておき、私は近年の中国文壇について一種軽薄な饒舌ばかり目につくような印象を持っていたので、率直に切り出してみた。

軽薄な饒舌とナシオナリズム

陳思和は次のように語った。彼はメディアの多様化を理由に漫画やアニメなどの世界に文学の代替作用を求める見方や、ショートメール形式の小説、ネット小説などに文学の新分野を想定する考えは間違っていると、それらに境界を引いた。文字を研磨し、文章を彫琢するという文学の根源的形質がそこにはありえないからである。私は、これにまったく同感だった。次に先ほどの指摘であるが、彼は近年の小説は「軽薄な饒舌」ではなく、「文学者の成熟」と見るべきだろうと言う。若手の作家の登場とともに、かつての実

品の監督彭小蓮さんと出会ったことも今回上海での忘れがたいできごとだった。胡風事件に連座して無残に殴殺された父を持つ彼女は、中国に存在するタブーについてはつきりと私に語った。小蓮監督が父母と自分の出生について書いた著書『彼らの歲月』は、国内で出版は許可されたものの広報が一切許されおらず、初刷のまま停止しているという。それなのに、この書は



彭小蓮監督(左)と著者(復旦大学光華樓にて。二〇一〇年八月撮影。)

蟻族 高学歴ワーキングプアたちの群れ

廉思 編／関根謙 監訳

四六判上製・定価二五二〇円(税込)

社会現象化する「働けない若者」の実態。

高学歴、弱小、群居……。中国で社会現象となつている高学歴ワーキングプア集団「蟻族」。高度成長の裏側で深刻化する、就職できない若者たちの実態に迫る。中国でベストセラーとなつた注目の書、待望の翻訳！

蟻族とは？

中国の社会現象。高学歴にもかかわらず、失業あるいは半失業状態にある、ワーキングプアの集団。知能は高いが単独で生きるには弱すぎ、群れをなすようにして集団生活を営む特性から、「蟻族」と呼ばれる。

国外で容易に入手でき、好意的な書評も見られるのだ。不思議な話だが、中国の読者はやはりきちんと読んでいるということだけは言えそうだ。

『蟻族』への期待

さてタブーといえば、都市部周辺に群居する高学歴低所得層、現代中国のワーキングプアの群れに関するレポー

ト『蟻族』が勉強出版から刊行された。それは社会主義では理念的に存在しないはずの、いわばタブーとされてきた社会事象についての報告であり、中国知識層のエリート集団人民大学出身の研究者たちが「蟻族」群居地域に潜入調査を敢行し、まさに泥まみれになつて書き上げた内容だった。彼らを導いたのは「蟻族」と同世代の若い正義感

だったと思う。日本の読者の反響を期待する次第である。

どこの国にも危険な傾向はあるし、実はタブーも存在している。本当に危ういのは、タブーを感じなくなつてしまふ眠りこけた知性だろう。



第一部 「蟻族」誕生記

接触／第一次研究調査
研究チーム

第二次研究調査／八〇後

第二部 「蟻族」のすべて

基本概念／発生原因
心理状態／性・恋愛・結婚
所得状況／職業／教育状況／インターネット
集団的行動の傾向

第三部 「アリ」伝奇―「群居村」取材レポート

都市のスキマ階層に触れる／北京での奮闘
非主流の道突き進んで／すべてはうまくいく
村から村へ／上京記／保険会社のガゼル
孤独な旅人／唐家嶺を離れる
下を向いた青春―「高学歴」貧民村調査
「大学村」での奮闘／唐家嶺のシヨバ代

二〇一〇年一〇月刊行予定

続「訓読」論 東アジア漢文世界の形成

中村春作・市來津由彦・田尻祐一郎・前田勉 共編
A5判上製・定価六三〇〇円(税込)

東アジアの「知」の成立を「訓読」から探る

東アジア漢文世界において漢文テキストは実際にはどのような〈で〉で「読まれ」、そこでいったい何が生じたのか、そこから何が形成されたのか―「知」の伝播と体内化の過程を「訓読」論の視角から読み解くことで東アジア漢文世界の成立を検証する。

序・「訓読」論から東アジア漢文世界の形成を考える／中村春作

第一部 東アジアにおける「知」の体内化と「訓読」

読誦のことは／齋藤希史
琉球における「漢文」読誦／中村春作
素読の教育文化／辻本雅史
明治前期の訓読体／前田勉
どう訓むかという問題の難しさ／小島毅
朝鮮半島の書記史／伊藤英人

第二部 近世の「知」の形成と「訓読」―経典・聖諭・土着

漢文の訓読、階層性、トポス／崔 在穆
平田国学と『論語』／田尻祐一郎
満洲語思想・科学文献からみる訓読論／渡辺純成
唐通事の「官話」受容／木村祐子
訓読から「辺境」を考える／澤井啓一

第三部 「訓読」と近代の「知」の回廊―文学・翻訳・教育

白話小説はどう読まれたか／川島優子
近代日本における白話小説の翻訳文体について／勝山 稔
明治・大正期の漢文教科書／木村 淳
中国思想古典の文化象徴性と明治・大正・昭和／市來津由彦

二〇一〇年一〇月重版出来予定

「訓読」論 東アジア漢文世界と日本語

中村春作・市來津由彦・田尻祐一郎・前田勉 共編
A5判上製・定価五〇四〇円(税込)

東アジアから「訓読」を読み直す

「訓読」という異文化理解の方法を再考し、日本伝統文化の形成、さらには東アジア世界の漢字・漢文化圏の文化形成のあり方を論じる。

序・なぜ、いま「訓読」論か／中村春作

第一部 異文化理解の「課題」としての訓読

「訓読」の思想史／中村春作
近代における「漢文直読」論の由緒と行方／陶 徳民
ビジン・クレオール語としての「訓読」／高津 孝
ベトナムの「訓読」と日本の「訓読」／若月純一

第二部 訓読と日本語・日本文化の形成

日本における訓点資料の展開／沼本克明
近世における漢文訓読法の変遷と一齋点／齋藤文俊
漢文訓読体と敬語／前田 勉
国語施策と訓点語学／山東 功

第三部 訓読論の地平

〈訓読〉問題と古文辞学／田尻祐一郎
表現文法の代用品としての漢文訓読／加藤 徹
日本漢文の訓読とその将来／小島 毅
漢文訓読の現象学／市來津由彦



脇役の渋い味—京都学を楽しむ

糸井 通浩

(龍谷大学名誉教授)

地域学と京都

もう四十年も前になるうか、一定の歴史と文化を持つ地域を学問の対象にする地域学と言うものの可能性を知った最初は、「奈良学」だったと思う。その後京都では、「伏見学」が名乗りを上げたが、遅ればせながら、十年ほど前やっと京都学を名乗る「国際京都学協会」が設立されて、今も盛んな活動が続いている。京都本ブームも背景にあり、その頃から「京都学」と銘打つ書物も次々と刊行されてきた。私が代表となつている、日本文化を語る会の「知恵の会」も京都学の本を三冊、勉誠出版から出していただいた。

地藏さんを祀った小さな祠がある。町内ごとにあると言つていいほど多い。八月二十四日前後には、地藏盆と言つて、お地藏さんを飾り付けて、子供が主役のお盆行事が町内会主催で行われる。

また、「角石」とか列石などと言われる、小振りの岩石が家の角や塀沿いに並べてあつたりする。様々な有り様をしているので、それを見つけて一体何のためのか想像してみる楽しさがある。鬼門避けだとか、沖繩の「石敢當」に相当する呪術的な意味があるとか、家の敷地の境界線を示すものだから、いろいろな説がなされているが、未だに謎の小岩石なのである。

③家の軒下には、「犬矢来」という竹で編んだ籬のようなものを見かける。雨だれが家の側面の壁を腐食しないようにしたものらしいが、犬が糞尿を引っかけないように設けたものとも。絵になる、風情のあるしつらえ

主役と脇役

皇居が東京に遷るまで、京都は千年の間都でありつづけた。その間維持され熟成されてきた風俗・習慣や文化は汲めどもつきぬ豊かさを誇っている。京都の魅力に触れようと観光する目玉スポットも目白押しで、そのためその主役だけをなぞっていくことになりがちで、脇役に目を向ける余裕もないことであろう。しかし、脇役こそ京都という舞台を引き立てているのである。日常の生活の場である路地に脇役たちは潜んでいる。路地から京都を観察して京都を感じて欲しいものである。

路上観察の醍醐味

平安京は縦(南北)と横(東西)の通である。また、「駒寄せ」という柵が、家の玄関の左右にめぐらせてあつたりする。折りたたみ式の「ぼつたり床几」が軒下にあることもある。店の場合商品と並べたり、夕方などに一服休憩のため腰掛けにしたりできるもの。

町屋のデザインとして注目されるのは、家の通りに面した側の「格子」である。中が外からは見にくいのが、内側からは外がよく見えるという工夫なのである。いわゆる「べんがら格子」が特色あるが、店の商売によつて格子のデザインが異なることも観察して欲しいことだ。

④家の二階の方に目を向けると、古い家だと屋根が緩やかな曲線を描いたものがある。「むくり屋根」という。中二階の家では、二階の窓のほとんどが「虫籠窓」という、特有の窓になっている。一階の屋根には、魔除けのための「鍾馗さん」の像が置かれている家が多い。さらに大きな商家の屋根に

りが碁盤の目のように敷き詰められて造られた。平安京以前の都もそうであったが、京都ではそれが千年続いて、通り(大路小路)の位置も昔のままであるものが多い。すーんと遠くまで細々と続く路地、その先に山が見えたりする、京都ならではの景観である。

①縦横の通りが交差する辻が至るところにある。その角の柱や壁、時には二階の柱などに、例えば「中京区・柳馬場通六角上る樋屋町」とか「御幸町通姉小路下る丸壁町」などと書いた、地所表示の鉄板の札が掛けている。縦横の通り名と町名が「上る・下る」などで結ばれている。古いものには「仁丹」のマークの付いたもの、新しいものにはライオンズクラブなどの提供したものがある。最近京都ならではの、「この「上る・下る」「西入る・東入る」という地所表示の用語が消えるのでは」という危機感が物議を醸している。

②路地を歩くと出くわすものには、おは、屋号などを書き込んだ「ガス灯」が突っ立っている。そのデザインは様々で、スケッチして歩くのも楽しい。商家などの屋号を示すものでは、「暖簾」も見所だが、一階の屋根などに据えられた、古い看板に注目したい。新しい看板は西洋流の横書き一行、つまり左から右へ書いてあるが、古いものは一字一行の縦書き、つまり右から左への横書き一行である。古い字体を読みながら何屋さんか推測するのも面白い。

⑤京の街中には、やたらと石碑が立ててある。それらをめぎとく見つけて、その地の歴史に思いを馳せる。特に角倉了以が開削した高瀬川の流域界隈には、諸処の藩の邸跡や志士の遭難の地であることを語る石碑が多く存在する。

その他、観光ガイドブックには書いてない、京都を語ってくれる脇役たちは多い。



地球環境問題と多様性

中尾正義

(人間文化研究機構地域研究推進センター長)

生物多様性の喪失が地球環境問題の一つとして問題にされている。しかし、生物多様性が失われると何が問題なのか、生物多様性はなぜ大切なのか、という問に答えるのはかなり難しいらしい。ゴキブリの嫌いな人にとって、ゴキブリが世の中から消えて何が悪いのか、ということである。人類は全力をあげて天然痘を撲滅してきたという歴史もある。

生物多様性とならんで、文化の多様性や食の多様性も最近急激に失われてきているという。これらの多様性も、失われると何が問題なのかと正面切つて尋ねられても、明確に答えるのは困難だとのこと(『生物多様性はなぜ必要か?』日高敏隆編、地球研叢書、昭和堂、

2005)。「なんとなく多様性は重要なのではないか」というのが多くの人の感覚ではなからうか。

いわゆる地球環境問題は、公害型の環境問題と異なり、その原因の特定が極めて難しい。原因が単一である場合は少なく、人間の日常的な営みが深くかかわる複合的な原因の帰結として問題が顕在化する。

複数の原因による様々な影響が相互に複雑に絡み合い、あらたな問題を引き起こしつつまた別の影響を引き起こしたりもする。因果関係もまた多様である。したがって、問題への対策を立てようとしても、多様な因果関係すべてを理解できないまま、いくつかの原因を想定して対策を立てざるを得ない。

い。対策それ自体がもたらす複合的影響をあらかじめ予測することも極めて難しい。

地球環境問題に対しては、その学問的取り組みがまだ始まったばかりにすぎない。多様な要素の複雑な関わりを解きほぐすことの難しさと、「行動」によって引き起こされる諸々の影響の連鎖をすべて想定することの難しさと両者を抱えている。

地球環境問題という人類史的課題に対して、何らかの対策を行うことが、特に為政者には求められている。しかし、様々な環境対策を行うにしても、対策という「行為」それ自身に導かれる様々な影響をすべて予測することは、上述のように、現状として難しい。最大限予測する努力をしても、想定外の結果が多々生じる。多様な因果関係が良くわからないからである。したがって現状では、想定外のことが生じるということを想定しておくほかは

ない。

中国においては、立案される様々な施策の実現性は非常に高い。中央政府の強い指導力のもとで、様々な施策を効率良く実現できるからである。地球環境問題に対する対策もまた然りである。しかし地球環境問題の場合には、上述のように、往々にして想定していないことが生じる。施策の立案時にはベストだと思われた場合でも、実施してみるとと初期に想定した結果にはならないことが多い。

「思いもよらない」想定外の変化へ対処するためには、多様な学問的裏付けが不可欠である。想定外の変化が生じてからでは、多くの場合、問題への

対処が間に合わない。不測の事態に対してある程度の対応をするためには、あらかじめ様々な知見を蓄積しておくこと、つまり学問の多様性を担保することが重要である。特定の学問研究が規制されていたがために、うまく適応できなかったことがあるという人類の歴史を直視すべきであろう。

地球環境問題でも、対策を考える政策研究が必要であることは言うまでもない。しかし同時に、自由な発想による多様な学問研究の基盤を確保しておくこともまた不可欠なのである。多様な学問分野にまたがる様々な要素が複雑に入り組んでいる地球環境問題においては特に、どのような想定外の事態

が生じるか予測することが極めて難しい現状だからである。想定外の事態に対処するには、学問の多様性を担保すること、つまり学問の自由を確保することが必須だと思ふ。

つまり多様性を維持することは、大きな摂動に対する適応のための戦略、あるいはそのための保険と考えられないただろうか。このことは、現象に対する理解が十分に得られていない分野や状況ではことさらに有効となるに違いない。学問の多様性に限らず、生物多様性や文化の多様性も含んで、多様性の確保は人類の適応戦略となろう。

(「天地人」十一号より抜粋)



中国の水環境問題 開発のもたらす水不足

中尾正義・銭新・鄭躍軍 編
四六判上製・定価二九四〇円(税込)

水が不足したのはなぜなのか。
汚水が増加した原因は何なのか。
それを防ぐ手立てはなかったのか。
その原因となった活動は不可避なのか。
発展著しい中国を中心に、
水をめぐる環境問題の背景を検討し、
問題そのものを見定める。



第一部 水資源
第二部 湖環境
第三部 環境とアセスメント

振り返れば私がいる——不思議の国への旅 (一)

立松和平

(作家)

フライドチキンというものをはじめ食べたのは、嘉手納基地の中だった。ヒッチハイクで私を拾ってくれたアメリカの男が、軍人クラブに連れていかけてくれたのだ。鶏肉を油で揚げたものにすぎず、今ならありふれているのだが、その時はなんとうまいものだろうと思った。旅をしていると贅沢をするわけでもなく、いつも飢えていた。それに何より、奢ってもらえるのが嬉しかった。

「沖縄はパラダイスだ。世界中でこんなに暮らしやすいところはない」
退役軍人で自動車販売業をしているその男はいった。支配者としてこの土地にいるなら、それは居心地がよいだろう。アメリカ人と沖縄の人は、貧富

会問題になっていた。

私は沖縄の風土の深みに魅せられはじめた。沖繩の現実にも目を開かされていった。

東京の晴海埠頭を出港する時、学生や労働組合のメンバーが岸壁や甲板に集まる。「沖繩を返せ」や「インターナショナル」を拳を振り上げて歌い、シュプレヒコールをくり返したりした。那覇港に着けば、同じ国なのに渡航の際身分証明書が必要なのは不当だとして、琉球大学の学生が船内で身分証明書を燃やしたりした。

身分証明書を燃やしただけで逮捕されるのはなお不当だし、琉球大学で集会があり、デモを組んで街頭にくり出した。私はそのデモの中にまじった。ゴムゾウリしかなかったものだから足を踏まれ、爪が剥がれそうになって血が流れた。東京での激しいデモに参加していたので、それでも沖繩の街頭行動はまだ緩やかであった。

の差も歴然としていた。だが私は反論できなかった。もともと口籠りはしたが、議論をするほど英語が達者ではなかったからだ。またこんな機会はないのだから、彼らのいい分を聞いておこうと思った。

男は本当に親切で、いろいろなところを見せてくれた。基地内は砂糖キビ畑であった昔の地形がそのまま残り、起伏に富んでいた。多くが芝生に包まれていて、その緑の中にアスファルトの白い道がのび、点々と散らばった建物や塗られた住宅が身を寄せあい、日本の風景とは明らかに違った。

西のはずれのほうに高い土手が築いてあり、視界が届かないようになって

沖繩本土復帰を願ったのは、多くの人がそうであったのだろうが、正義感からであった。私は東京に帰るとアルバイトをして金を貯め、しばしば沖繩にいった。晴海から那覇に行くこともあったが、鹿児島新港まで汽車に乗り継いだりヒッチハイクをしたり途中旅を楽しむながらいつて、そこから那覇行きの船に乗ることもあった。晴海からなら船中に二泊しなければならぬが、鹿児島からは一泊ですむ。

帰りの船に乗った那覇港で、印象的な光景に出くわしたことがある。集団就職をする中学卒業生を東京に送り出すため、親や親戚や知人が岸壁に見送りにきていたのである。別れの情が切なくて早々と紙テープを投げてしまいい、両端を持ちあつていいるのだが、なかなか船は出港しない。言葉もい尽くしてしまつたその時間は、間が持たないものである。紙テープも風に吹き千切られてしまう。あれほど流れた涙

ていた。その向こうが嘉手納基地なのだ。飛行場についてみると私は控え目に入ったのだが、はつきりと拒否された。それだけは譲れないという雰囲気であった。

この飛行場から連日連夜北爆の爆撃機が飛び立っていた。北ベトナムのハノイを攻撃していたのだ。南ベトナム軍とともに戦っているアメリカ軍は、南に兵力や物資を送ってくるその元を断とうとしたのだ。しかし、その作戦は国際的な批難を浴び、沖繩でも日本でも反戦デモが渦巻いていた。北爆に向い、爆撃機B52がすさまじい爆音とともに次々と空の彼方に去っていく。B52は黒い機体で、夜の闇にまぎれ、いかにも精悍な姿をしている。当時は世界最強の爆撃機だった。離陸していく光景は圧倒的な暴力を感じさせた。このB52のジェット燃料が地中に染みてフェンスの外にある嘉手納村の民家の井戸に出て、騒音の害もひどく、社

も無惨にも乾いてしまうのである。

ぼうつーと汽笛が鳴り、船が動き出すと、一斉に五色のテープが投げられてあたりは花が咲いたようになる。船上と岸壁とお互いに声が投げられ、涙が流れてくる。その別れの光景の中に身を置いた私も、泣き濡れてしまうのであった。

船の旅とは苦しいものである。二等船室はカーペットの敷いてある船倉の広間に毛布一枚をあてがわれてゴロ寝で、甲板に出ないかぎり一日中天井を見ていることになる。波の動きのとおりに船は揺れる。全体がせり上がっていくその先端には、私がいる。ぐつぐつと登っていき、登りつめた瞬間に放たれ、そのまま沈んでいくのだ。重量をなくして落ちていく瞬間、身体を支えていた床がなくなつたようで心細い気持ちになる。それから何処まで沈んでいくのだろうと不安になる落下の感覚が、まことに気持ち悪い。吐いた時

のための洗面器がそのへんに置いてあり、用心のため一つを近くに引き寄せしておく。無理に我慢しているより、いつぞ吐いてしまったほうが楽である。我慢に我慢を重ねていると、隣りの人が吐き、つられて吐いたりもする。

三食の食事が時間になると一皿に盛られて運ばれてくるが、食べられるのはたいてい二日目になってからだ。飛行機に乗るなど、もちろん経済的事情から考えられなかった。船が当たり前だった。海はまさに越えなければならぬ困難な境界だったのだ。

まわりの人が親切なので、沖縄の旅は楽しかった。沖縄、奄美、つまり琉球の旅ははじめは童宮城にいるように楽しいという意味のことを、島尾敏雄さんは書いている。だが時間がたつにつれしだいに風土の深みにとらえられて苦しくなる。まさに私は童宮城を旅しているのだ。ヒッチハイクのた

めの車は目を見合わせただけで止まってくれたし、どこにでもある公民館にいくと、多少の逡巡の色は見せられたが、たいてい泊まらせてくれた。

金を使わない旅であるはずなのだが、最初から持っている金が少ないので露銀が尽きた。身体が元気だったので、仕事を見つければいいのだと軽く考えていた。私は天地一枚の間にいるのだという自由な感覚である。

私は沖縄の北部にいた。ヒッチハイクで拾ってくれた人に、何処かで働きたいのだがと相談した。それなら砂糖キビ畑にいけば、いくらでも雇ってもらえるということだった。仕事がつきいので、働こうという人が少なく、慢性的な人手不足である。やる気さえあればいくらでも紹介してやるといわれた。ちょうど砂糖キビ刈りのシーズンで、あつちの畑でもこつちの畑でも働いている人の姿が見られた。砂糖キビ刈りの仕事はつらそうだが、できない

わけではないだろうと私は思う。

知り合いの農家があるから紹介してやると、ヒッチハイクで乗せてくれた人にいわれた。農家のほうでも人が欲しいので喜ばれるだろう。車に乗せてもらっていくと、砂糖キビ畑は平地にあるのではなく、起伏のついた山の地形のところにあるのだった。緑の濃い砂糖キビ畑の一面に人が集まり、ばさばさと音を立てて刈り倒し藁縄で結束している。その人は道端に車を止め、一人で畑にはいつていった。年配の男が鎌を持つ手を止め、男と話し合っていた。私は道端で待っていた。思いがけず時間がかかっていた。



〔立松和平小説〕第二巻より抜粋・つづく

めし・ご飯——くいものの語源と博物誌——

小林祥次郎

メシという語はさほど古いものではなく、見え始めるのは室町時代ころからだ。語源についてはいろいろな説があるが、「召す」の名詞形とするのがすつきりしていて穏やかなところだろう。召し上がるものというところで、本来は敬意があつたはずだが、『義経記(古活字本)』(五)に「忠信は酒もめしもしたためずして」(この例は「しゅ(酒)もはん(飯)も」となっている写本もある)とあるなど、すでに敬意は無くなっていた。そこで、さらに敬意を表すにはオメシと言った。一六〇三年にイエズス会で作った『日葡辞書』に「メシ(マシ) 尊敬の助辞。例、Vomexi(ヲメシ) 誰か尊敬すべき人のために作った飯、または、食事」とある。

それ以前はイイ(歴史仮名はイヒ)と言った。『日本書紀』(推古、歌謡・一〇四)の聖徳太子の作という歌に「しなてる

(枕詞) 片岡山(奈良県北葛城郡)に飯に飢(こ)や 臥(こ)せる その旅人(たび)あはれ」とある。「いひ」は、今は単独ではあまり用いないが、飯田・飯塚・飯山など地名や姓氏には残っている。語源について、新井白石は、ある人の説として、

イは発語、ヒは古語にヨシ(良)ということで、イヒは美食であることを言うとし(東雅・飲食、服部直はイミヒ(忌火)で、もと不浄のない火で炊くのを言うとし(名言通)、大槻文彦も「忌火(イミヒ)ニ縁アル語カ」(天言海)とし、松岡静雄は「イ(接頭語)ヒ(胎芽を意味する原語)」(日本古語大辞典)とし、賀茂百樹は「息

をつなぎ止むる霊の義といへど、ヒは実の義なるべし」(日本語源)とする。こういう基本的な語の語源は分からないとするしかない。

『万葉集』の山上憶良の「貧窮問答歌」(五・八九二)の中に「甑(しほ)には蜘蛛の巣かきて」という一節がある。「甑」は土製または木製の米の蒸し器のことだ。奈良時代には「飯」は蒸して食べれていた。

それに対して、煮たものは「粥(かゆ)」と言った。『続日本紀』(二)の文武天皇四年(七〇〇)三月十日に亡くなった道照和尚の事績を書いた中に、道照が唐にいた時に、「水を暖め粥を煮て、遍く病める徒(とら)に与へたるに」、その日の内に治った、とあるのが最古の例だ。源順の辞書『倭名類聚抄』に、「厚粥(しんこう)をカタカユ、「薄糜」をシルカユと區別してある。今の飯にあたるものがカタカユで、水分の多い今の粥はシルカユと言った。平安後期には炊いたカタ

メーラムガジンの登録申し込み・取り消しはwww.kana.com

カユが普通の食事になったようで、後にはこれをイヒと言うようになった。

「ごはん(御飯)」はかなり新しく、江戸末期からのようだ。慶応三年(一八六七)に出たJ.C.ヘボン(Hepburn)の『和英語林集成』に、

GOHAN, ゴハン, 御飯, (o-meshi) n
Boiled rice, meal.

として、その後に、アサゴハン breakfast' ヒルゴハンをdinner' ユウゴハンをsupper'と記してある。

室町時代には、「酒に望みをなす人もあり、はん(飯)をしたためんとする人もあり」(義経記・五)、「さらば一切衆生の用ゐるはん(飯)の上を」(曾我物語・一一)など、ハン(飯)だけで用いることがあった。それに敬意のオを付けたオハンを女性語として用いることがあり、元禄五年(一六九二)の『女中言葉』に、「おはん みぐご(御供御)

イトレスから「ライスですか」と言われて、「ゴハンだ」と応じたら、茶碗に盛ったのが出てきたそう。ライスは白い皿に乗っているものなのだ。その時に「メシだ」と言ったら、丼に盛ったものが出たかもしれない。

林芙美子の小説『めし』という題名には身近な庶民生活を感じるし、永井龍男の短編『黒い御飯』には、幸福を感じさせる「御飯」に不吉な「黒い」をかぶせる不調和で、何だろうと思わせる。



食の事」とある。江戸後期には、「お飯」よりまんまの膳を先へ出し(子供の膳を先に出した)(柳多留・一二三三)のようになり、女性でなくても用いるようになった。

ゴゼン(御膳)というのは、もともとは天皇や貴人の食事のことだったが、江戸時代になると、江戸吉原の遊廓の茶屋の女房が客に、「お吸ひ物をお吸ひなんして、お出なんし」と言うのと、客が「いやいや、なかなか飯どころではない」(遊子方言170)と言うなど、食事、飯を丁寧(ていねい)に言うようになっていく。

江戸前期からママという語も使われていた。子供の遊びのママゴトのママだ。寛文四年(一六六四)の句集『落穂集』(夏)に「すしな子のととにそへてやまま食はう 一景」という句がある。『言海』に、「旨旨ノ約」小児ノ語。飯ニ同ジ。マンマ」とある。赤子の喃語(言葉にならない段階の声)が語源

ということだ。ママは関西の作品に多く見られ、式亭三馬の『浮世風呂』(二上)では上方から江戸へ来た女が、「さいな。これから往(い)たら、わし所へお出(いで)て飯食(ま)んか」と言うところがある。

ママの間にンが入ったのが、先の『柳多留』(二二)にあったマンマで、それに丁寧(ていねい)にオを付けたのがオマンマだ。為永春水の『春色梅児誉美』(二)で、芸妓の米八が「そして飯(おたま)はありますかえ」と言うと、色男の丹次郎が「ム、おめしはゆふべ向かふのおぼさんが来て炊(い)てくれたからいゝが」と応ずるところがある。オマンマはもととは子供や女性が用いたようだ。

イヒからメシ、さらにゴハンへの変化は、丁寧な上品な言い方へという推移だろう。今ではメシはぞんざいな語で、ゴハンのほうが品が良い。洋食屋などでは、上品さをねらってだろう、ライスと英語を使う。昔、友人がウエ

京都学を楽しむ

古都をめぐる33の講座

知恵の会(代表・糸井通浩) 編
四六判上製・定価三五七〇円(税込)

そう、この本持って、京都、行こう。

京野菜、祭り、仏像、観光学、京気質、酒、京菓子…。京都は伝統的な文化都市でありながら、たえず革新でありつづける。

そこに、京都学の大きな魅力がある。そこにおき、ほんまもんの京都を楽しく知的に案内。

- I 自然 樹木/水辺/山/池/京野菜/四季
- II 文化 物語/祭/庭/焼き物/通り/京ことば/遊び
- III 信仰 祇園/御霊/布教/仏教/仏像/墓/葬送/社
- IV 学芸 歌道/華道/茶道/学問/芝居/観光学
- V 衣食住 京気質/酒/商い/おかず(副食)/織物/家/京菓子

立松和平 歴史へのまなざし

立松和平 著
A5判上製・定価四七二五円(税込)

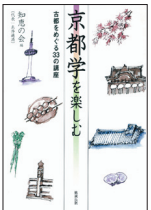
「もうすぐでつかい祭りがはじまるぞお。」

無尽に存在する名も無き庶民の「歴史」に目を向け、挫折と絶望の体験を基底に小説化する。

みずからの足下故郷に豊かな「神話と歴史」を発見し、矢継ぎ早に放たれた短篇群『天狗が来る』と『二つの太陽』その集大成として、反権力の見果てぬ夢を描いた長篇『贗南部義民伝』。

歴史の闇に沈んで名も忘れられた敗者への鎮魂の物語。

天狗が来る/ふたつの太陽/贗南部義民伝/振り返れば私がいる 8 解説 青春のかたちVIII(黒古一夫)



小論・研究余瀆・随想など本誌にお寄せ願います。詳細については「投稿募集」をご覧ください。

◆◆ Web ページのご案内 ◆◆ <http://www.bensey.co.jp/>

近刊を含む書籍の内容紹介から、新刊・既刊書籍のご購入、最新ニュース・書評掲載情報など。

◆◆ ご注文方法 ◆◆

- ① web ページによるご注文 <http://www.bensey.co.jp/howtobuy.html>
- ② 電話・FAX によるご注文 電話：03-5215-9021 FAX：03-5215-9025

◆◆ お支払い方法 ◆◆

銀行振込・郵便振替・代金引換払*・クレジットカード**等がご利用いただけます。
(いずれの場合も、送料が別途 300 円かかります)

① 銀行振込の場合

三菱東京UFJ銀行麹町支店普通 3848245 ペンセイシュッパン(カ)

② 郵便振替の場合

00120-3-41856 勉誠出版株式会社

* 代金引換払の場合、別途代引手数料として 315 円かかります。
(ご注文が 3,000 円未満の場合のみ)

** クレジットカードのご利用は、当社サイトからのご注文に限ります。

投稿募集

「勉誠通信」へのご寄稿を募集いたしております。
現在のご研究内容の紹介や、ご興味をもたれていることなど、ご自由にお書き
いただければと存じます。

◆ 執筆分量…誌面二頁(一五〇〇字程度)ないし三頁(二三〇〇字程度)
◆ 入稿形式…テキスト形式(ワード、一太郎形式も可)

◆ 謝礼…ご執筆誌面一頁につき一〇〇〇円分のポイントをお渡しいたします。
ポイントは、小社の書籍を直販にてご購入いただく際にご利用いただけます。

◆ お問合せおよび送付先… mninfo@bensey.co.jp
メールアドレスに「勉誠通信原稿」と明記してください。

編集後記

九月七日、出版クラブ会館にて行われた版元ドットコム入門勉強会「アメリカ
大学図書館の和書取集と電子化の歴史と未来」ミシガン大学アジア図書館日本
キュレーター・仁木賢司氏に訊く」に参加して参りました。

伺ったお話の内容は多岐に渡り、限られたスペースではとても紹介しきれませ
んが、世界最大規模の仮想図書館を目指すハーティラストについて、ミシガン
大学と Google との連携の話は非常に刺激的な内容でした。

他にもオンデマンド自動製本機「エスブレッソ・ブック・マシン」で実際に製本
された一〇〇年程前の書籍も拝見させていただきましたが、簡単な表紙までつい
ており、想像以上に立派なものでした。既にオーストラリアの大手書店では設置
されているとのこと、また三省堂書店の神保町本店には近い内にお目見えする
そうです。こうした動きが出版社にどういった影響を及ぼすのか、私にはまだ判断
できませんが、今後も関心を払い、推移を見守りたいと思います。

さて、話はやや強引に変わりますが、シリーズ「ネットワーク時代の図書館情報学」
の最新刊『デジタル書物学事始め』を刊行いたしました。「デジタル化」の進行
は書物研究にどういった展望をもたらすのか、二〇〇頁ほどの分量ですが非常に読
み応えのある内容となっています。ぜひ一読ください。
(清井)